

■ 編集だより

編集後記

第 166 回アメリカ精神医学 (American Psychiatric Association) 総会は、今年度サンフランシスコで開催された。今回の総会は、近年停滞気味にあった APA 総会が 10 年前の勢いを取り戻したように盛況であった。その盛況の陰には今回総会にあわせて精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版 (DSM-5) の待ちに待った出版があったのは誰の目にみても誰の目から見ても疑いのないものであった。今回の学会は通常機内持ち込み荷物しか持ち歩かないにもかかわらず DSM-5 を購入するためにわざわざバックを預けての DSM-5 のための APA 参加だった (後に福岡の日本精神神経学会で DSM-5 が発売されているのを目前にして思わず本の重みが何倍にも感じたのを記憶している)。

サンフランシスコに到着するなりすぐに会場に向かい登録をするとすぐさま APA の書店に向かった。山積みの DSM-5 とそれを買う長蛇の列は今回の APA 総会の事務局が仕組んだ罫とは感じつつも何冊も DSM-5 を買わずにいられなくなってしまうのは一種のグループの力動だろうか? そんなことを思いながらも日本人らしく整然と列に並んでいると何人かの知った顔も列の前後にみられ自分だけがお祭りの熱に翻弄されているわけではないのを知ってほっとした。

DSM-5 本体を斜め読みしてみると、多軸診断がなくなったことや、今回の改訂では subtype が多くの疾患で廃止された一方で specifier が多く作られた。今後 specifier をどのように実臨床で使っていくかは混乱があるのではないと思われる。簡単にであるが DSM 全体の構成を紹介すると、section 1 DSM basic, section 2 diagnostic criteria and codes, section 3 emerging measures and models に分かれ構造が大きく変わった印象であった。今回の改訂では section 3 では広い意味での dimension 的な評価と、文化的、性別による違いなど従来の DSM が軽視した部分に光が当てられたことに関しては画期的だったと思われる。今回の改訂では section 3 が大事な気がするが同時に発売された desk reference には section 3 に関連した記載はなく厚い DSM の本を買って読まないで単なるチェックリストに終わってしまいそうだが、是非厚い DSM を少なくとも読んで欲しい。GAF がなくなったのも大きな変化である。GAF は、severity と impairment の両方が混在しているので削除し、severity は specifier で記載し、impairment は WHO の disability assessment schedule 2.0 (WHODAS2.0) が使われるようで section III に追加された。

DSM に関係するシンポジウムでは DSM の改訂に関する批判が堂々となされ、書店 (APA の書店を除く) では DSM-5 を批判する書籍が山積みになりそれも勢いよく売られていた。大きな議論は bereavement が除外項目から外されたこと、ADHD の成人診断、複数の新設された診断への妥当性と信頼性への批判など、これらの書籍に書かれていることは本来出版する前に議論されるべきことがなござりにされてきたこと結果だろう。多くのシンポジウムでは今回の DSM-5 は DSM-5.0 であり次に 5.1, 5.2 と改訂されていくことが議論されていた。まるで診断基準がコンピューターソフトのようになってしまったのかと時代がまた 1 つ変わっていくような印象を持った。

さらに、DSM-5 の出版の前後に APA と National Institute of Mental Health (NIMH) との間で DSM-5 の研究の中での位置づけに関して、ブログを介してのやり取りがあり最終的に、APA の会長の Jeffrey Lieberman と NIMH の Tom Insel の間で DSM-5 は臨床家のためのものであり、研究のためには NIMH の作成した Research Domain Criteria (RDoC) という共同声明が出された。

またこの総会に参加して、明らかに ICD と DSM のハーモニーは夢物語であったことがわかってきた。今年は精神科診断がある意味で大きな転機を迎えた年ではないかと思う。

齊藤卓弥